

## [最優秀賞]

# 看護師になるということ



愛知黎明高等学校 看護科3年 小林 紅璃

「嫌だあ…」。受け持ちになったAさんが私に初めて発した一言。

「今週から実習に来る学生さんに担当させて頂いてもいいですか?」。指導者さんがAさんに尋ねた時の返答がこれであった。わたしは気まずくてどんな顔をしてその場に居ればいいのかかわからず、ただただ苦笑いしていることしかできなかった。

身の置き所もなく佇む私の傍らで、その後も指導者さんとAさんの会話が弾んでいる。すると、Aさんがすっところちらに向き直って、にこやかな表情で「…というのは冗談でえ、いいよ。」と優しい言葉を返してくれた。指導者さんのわかりやすい説明に納得し、引き受けることを決意して下さったのだ。実習ができること背景にはこのような沢山の方の支えがあることを改めて実感した瞬間であった。担当させて頂くことになったからには、自分にできることを全力でやろうという熱い想いと、初めて経験することへの緊張と不安が一気に込み上げてくるのを感じていた。

Aさんは80歳代の男性。脳梗塞を患い、体の左右ともに麻痺がある。意識も清明とはいえず、声を掛けるとしっかり受け答えができる時とそうでない時が1日の中におきている。昼夜関係なく傾眠状態にあり、その上、認知機能の低下が見られる方である。そのため、ベッドサイドに伺っても目を閉じたまま見えることが多く、そんな時は会話も成り立たず、情報を収集することがとても難しい状況であった。

私はAさんに合った看護を提供するためには一刻も早く情報を収集しなくてはいけないと焦り、発言一つ一つ総てを鵜呑みにしてしまうことが度々あった。

ある日のこと、持病である心不全の症状を確認する為、「胸、苦しくないですか?」「息をすると辛くないですか?」と声を掛けた。すると、「苦しくないよ。」ときっぱりとした返事があった。この言葉に安心しきってさっさと退室してしまった。受け答えもしっかりして見えたので、すっかり問題ないと思い込んで他の様子を観察することもせず、報告しようとしたその瞬間、観察の基本を怠っていたことに気づき、固まってしまった。『どうしよう…。何も確認できていない』。呼吸状態はもちろん血圧、脈拍、経皮的酸素飽和度(以下、「酸素飽和度」と略す)の測定など、言葉ではわからない身体異常の有無を全く把握していないことに気づき、頭の中が真っ白になった。慌ててもう一度訪室した時、Aさんは傾眠状態であった。『あっ、大丈夫だろうか。』

声を掛けるとAさんはうっすらと笑みを浮かべて頷いた。酸素飽和度を測定しようと握ったその手は温かく、ほっとした瞬間、酸素飽和度は93%。それは生理的範囲内の95%に達しておらず危険な状態だった。すぐさま指導者さんへ報告し、ベッドをギャッチアップし深呼吸を促した。その後しばらくして98%まで回復し、安定域に戻った。

『私のせいで、大変なことをしてしまった。』申し訳なさと気持ち押し潰されそうになった。自

分の無責任な判断と行動を猛省した。

患者さんの状況を正確に把握し、それをどのように援助に活かしていくか、真のニーズは何かを考え、援助を組み立てていくためには、その場その場でのアセスメントが重要である。正しくアセスメントする力があれば、発言だけで判断せず、立ち止まって考えることができたはずだ。そして必要な援助が提供できていたのではないだろうか。「安全な療養生活を提供する」看護の役割を痛感し、二度とAさんを危険にさらさないことを心に誓った。

実習5日目のこと、Aさんの身体を清潔にしようと援助を計画した。カルテや作業療法士の方からの情報では、麻痺の程度は軽く、多少姿勢の傾きがあるが、自分で柵を持ちベッドの端に座ることが可能であることがわかっていて、だが私の技術では座位での援助は難しいと判断し、寝たままで清拭を行うことにした。

すると指導者さんから「どうして仰臥位で行うことにしたの？ Aさんは座ることはできますよね」と助言を受けた。私はAさんに掛ける負担を少なくすることだけを考え、ADL(日常生活動作)を向上させることを考えていなかった。その後、指導者さんとともに座位で援助させていただいた。「ベッドの端に座りましょうね。背もたれはありませんよ。」と声を掛け、傾いてしまいそうな身体を何とか支えながら清拭を行った。辛そうな姿勢で「早く終わらないかな。」とAさんの表情が訴えて見える。技術の拙さを申し訳なく思った。

その時その瞬間に患者さんがどんな気持ちであるか、そこにどんな声掛けがあったら心地よくケアを受けて頂けるのかがとても重要である。それと同時にADLの向上に向けて、自分で行えることを増やしていくための支援をどのように提供していくか、学べた1日であった。

実習中、毎日のようにアセスメント不足を指摘され指導を受けた。何度取り組んでも充分にできないという厳しい現実が気持ちがいよいよ空回りしていた。苦しくて悔しくて、その気持ちがAさん

に伝わってしまったのか、ある日「頑張れ、頑張れ。」と背中を押すように言ってくださった。『看護する私がAさんに心配させていたんだ、申し訳ない。』

Aさんの言葉に救われた思いだった。「ありがとうございます。頑張ります。」

こんな私を応援してくださるAさんに応えられるよう踏ん張ろうとは思いますが、アセスメントが上手くできない自分に嫌気が差す。Aさんのことを考え、援助の計画に結びつけてこそ、初めてAさんに寄り添った看護が提供できるのに。また涙が出そうになる。

計画のやり直しが続くが、Aさんへの思いは誰にも負けないと自負し、踏ん張れた。ほんの少しづつではあるけれど工夫を重ねている。Aさんが退院してからも困らないように、「あと少し、今日も頑張れました。」「今日は元気がないようですが何かありましたか。」、様々な場面を重ねていくことができた。

容態も安定し、Aさんは今日、リハビリ専門病院へ転院する。病室で家族の方と転院の確認をしていた時のことである。傍らで「2週間、ありがとうございます。」と伝え、Aさんは涙を浮かべながら私の手を握りしめた。

迷惑を掛けてばかりで、満足できる看護を提供できず、申し訳ない思いで一杯だった。こんな私を受け止めていてくださったことにただただ感謝しかなかった。

お見送りの際、これまでに味わったことのない感情が込み上げ、涙をこらえるのに必死だった。

患者さんが抱える疾患、治療に対する不安な気持ちに寄り添うこととともに、目の前にある生きることへの希望と幸せと一緒に見つけていける看護師になりたい。これが私の掲げる理想の看護師像である。Aさんに出会ってこの思いはさらに強まった。

この先、悩んだり、失敗したり、挫折しそうになったり、いいことばかりではないと思う。けれど私は看護師になりたい。そう信じて、またここから進んでいきたい。